



TITLE:

<大會抄録>唐代視朝制度考

AUTHOR(S):

松本, 保宣

CITATION:

松本, 保宣. <大會抄録>唐代視朝制度考. 東洋史研究 2003, 62(3): 504-504

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155529>

RIGHT:

あった。

北魏分裂後の社會にしばしばみられる胡漢の激しい對立は、必ずしも種族問題とはかわらない分裂後の様々な對立が、しだいに胡漢の文化的な對立として塗り分けられていったことによるものであり、北魏史の基本史料である『魏書』も、そうした對立を背景に書かれたものである。

唐代視朝制度考

松 本 保 宣

唐王朝の政策決定の場の一つに、皇帝自ら主宰する御前會議が挙げられる。普通聯想されるのは、朝廷に大事あつて臨時に召集される會議であるが、唐王朝の場合、恒常的に舉行される御前會議が制度として存在し、日常的な政策決定の場として定着していた。むしろこちらの方が遙かに重要である。これこそ朝會儀禮の一環として行われた視朝（聽政）に他ならない。その様態は概ね二系統に分かれる。一つは常朝儀禮に伴い正殿で舉行される奏事であり、もうひとつは正殿以外の宮殿で行われる便殿議政である。前者が場所・参加者・日時が規定された定例の御前會議であるならば、後者は、臨時に任意の参加者を指定できる柔軟な制度であった。具體的な場として、正殿は唐初、兩儀殿であり、その後紫宸殿に定着し、便殿は、宮城の任意の殿から次第に大明宮の延英殿に固定していく。正殿常朝について、「入閣」なる儀禮の存在

と共にその實態が古來議論の的であつたが、概ね前述の如く紫宸殿が中心とみてよい。唐後期では便殿延英殿の議政が、その機能の柔軟性もあつて視朝の中心を占めつつあつたが、九世紀中葉の文宗の改革により紫宸殿が再活性化され、紫宸・延英兩殿の機能が共通化される。御前會議は口頭でなされるが、その議決事項は文書行政にリンクしており、又、宰相主導の案件も皇帝が聽政の場で修整可能で、それがある程度制度化されていた。實質的に王朝最高レベルの政策決定の場と評價されよう。

チンギス「ハーン廟」の起源

白 石 典 之

チンギス「ハーン廟」（成吉思汗陵）は現在中國内蒙古にある。そこはモンゴル民族の精神的據り所であると同時に、古式に則った祭儀を残していることから、モンゴル文化の研究においても重要な場所となつている。内蒙古にチンギス「ハーン廟」の存在が史料で確認できるのは、遅くとも一六世紀初頭といわれている。その源流はチンギスの墓前に設けられた祖宗の靈廟「八白室」にあるといわれ、漠北の地にあつたとされるが、具體的な場所や構造はわかつていなかった。

報告者はモンゴル國アウラガ遺跡で考古學的調査を行い、そこがチンギスの本據地「ヘルレンの大オールド」址であることを確定し、宮殿址とともに、それを改造した特殊な建物址を発見した。